

愛と女性

一、愛は暗なり光なり

真勇の根底は慈悲であります。我等は勇氣が慈悲の心から流れ出た時のみ、真の勇氣と申します。もし、怒りや無智な大胆や、狂暴性が勇氣の根底であるならば、女性は勇者にはなれませぬ。しかし愛が勇氣の根底であることを知る時、女性もまた勇者であります。愛は時に光であります。愛ゆえに働きます。戦います。忍びます。愛は実に力であります。

「女は弱し、されど母は強し。」

母は慈愛そのものの権化であらねばなりません。母性愛は女性をして実に英雄の如く力強くします。実に女性は地上での美しきものの一つであります。身体も心情も女性は美しく作られています。こまやかなる愛の情緒は女性のみ有する天然の宝であります。

しかしながら、その美しいものには又、一番醜さも潜められていきます。これは解くことの出来ない謎であります。宇宙至高な調和はむしろここに秘められてあるのかも知れませぬ。女性は一番美しいが故に、又一番醜いものであります。仏法の言葉に「外面如菩薩、内心如夜叉」とあります。菩薩と夜叉とは真反対であります。觀世音菩薩と鬼とが一つになつて女性を作っているのかも知れませぬ。女性が一度、理智の明を失つて、愛と憎悪に変えた時、菩薩は忽然として鬼に大蛇に変わります。鬼や大蛇は決して光の天地には出て来ませぬ。暗黒の唯中にのたうちかえすのであります。1 安珍を大蛇となつて鐘の外から巻き殺した清姫や、あるいは予言者ヨハネの生首を求めてその口にキッスするサロメ、あるいは信仰深き嫁を苦しめるため鬼の面をかぶつて竹藪に出た鬼婆等はその例であります。たいがい、男は老年になるだけ柔和な人好になりませんが、女性はどうか見ても、若い方が心がやさしく、年をとるだけ面の皮も厚く言語も野卑に、一切が汚く意地悪くなつて、悪く變つてゆくようであります。

情の修練は女性を高める一番大事なことだと思われれます。

美しき情操の前には一切は生きて来ます。一切は動きます。相や顔すがただけの美は一週間であきがきます。顔を美しくすることに骨を折りつつ、心を美しく磨くことを考えないのは悲しいことでもあります。それは単に男性の御機嫌をとるためではなくて、女性それ自身を實現するためであります。苦惱の中に立ちつつも暗の中に燈明として生きてゆくあなたでありたい。

二、人生創造と愛

愛なき人生は考えることは出来ません。生きるとは、しよせん愛それ自身であります。

人生は限りなき創造をつづけてゆくことあります。食うこと、住まふことは、それ自身では決して何の意味もありません。生きるとは、こうした肉体的生活の上に限りになき価値を見出し、価値を創造することあります。この価値の創造をはなれては人生は一切無意味であります。価値を創造するとは、人生を熱愛することあります。

す。平気でただ生きるに堪えないで、ほんとうに現実のありたけを抱きしめて、人生に対する深い熱愛を感じることあります。釈尊のように王宮も王位も、父も妻も子も棄て、出家せられたのを見ると人生を捨てたように見えますが、それは皮相な考え方であつて決してそうではないのであります。釈尊にしても、孔子にしても、親鸞聖人にしても、数多の聖者はほんとうに人生を熱愛された方々であります。如何に人生五十年を熱愛されたか、一切の人類の上に熱い涙がそそがれたか、人類に対する熱愛者のみが真に人類の尊い価値を獲得するのであります。

道を熱愛する者が道を得ます。
仏を熱愛する者が仏を得ます。

真理を熱愛する者が真理を得ます
花を熱愛するものが花を得ます。

伸ばねばなりません。
育たねばなりません。

伸びるとは、育つとは、限りなく人生の価値を創造することあります。言いかえると愛の心の成長であります。

私の心中には、高慢心や、卑下心や、邪見や、憎悪や、貪欲や、愚痴や、懈怠心がひそんでいます。見つめれば見つめるだけ、内省すればするだけ、如何にこれらの価値創造をさまたげる心の深くあるかを見ねばなりません。しかし考えて見れば、そうした暗い悪魔の心根がちつともないのであれば、光もなければ、精進もいらぬ。いえ価値の創造ということすら無意味である。聖者ほど、この暗い心の根強いこと、深いことを痛感せられた。彼らは真に人生の熱愛者であつたが故に、地上の暗と矛盾、不調和にも心をいためたのであります。それがやがて一切人類を救う大信念の生れる源であり、世の光となる根本でありました。私どもは今、智慧の眼を人生に光らせねばなりません。無関心であつた人生を熱愛せねばなりません。

三、自愛

自分自身が火鉢でなくて、どうして、他の人たちの火鉢になれよう。自分自身が光でなくて、どうして、社会の光となれよう。だから我らはただ外にばかり動いていて、他人の世話係としておわつてはなりません。他人を愛すると思つている人はある。けれども自分自身を愛する人が少ない。

何故に自分自身を粗末にするのだろうか。

自分自身の道をもつとはつきり知ろうではないか。

自分自身を救おうではないか。

自分が自分を愛してやらないで誰が自分を愛するのでしょうか。

何でもないことに苦しめてはいないか。何でもないことばかりに困らしてはいないか。地獄の火に自分をなげ入れるのも我である。冷たい水の中に自分を苦しめますのも我である。尊い世界に導くのも我である。他人の世話はするが自分の世話が足りない。もつとはつきり、ほんとうの我を知らう。そしてこの私のためにもつと忠実な下僕しもべにならう。

聖者たちは、自分を見た。あまりに悲しい自分を見た。だからこそ懸命に自分を救いにかかった。自分を自分が棄てていった誰が自分を助けるのか。

四、礼と愛

愛するとは合掌することである。手をつく事である。頭を下げる事である。

支那の孔子は、人の道を「忠恕」だと言い、「仁」だと言いました。そうしてその具性的顕現を「礼」だと申しました。礼とはただ挨拶する時の言葉や儀式や作法のことではありません。

礼は礼讓であります。低い心であります。礼讓をはなれては、忠も、孝も、教育も、政治もなかつた。礼讓のない世界には、人の道はなかつたのです。

由来、礼とは、身分の低い者が身分の高い者に、子供が親に、弟子が師匠にむかつてだけあるものだと浅薄に考えられています。真の礼はそんなものではなかつたのであります。

礼は一切万人の道であります。

親が子を育ててやるのだと高くとまつている所には真の親はいませぬ。そんな礼のない親が子供にむかつて孝行を強いつけます。孝行を強いつけている世界には、親子の間を一つにする美しい孝の世界は親によつてふみにじられてあります。決して真の孝道はこの親の前には表われません。親が孝道の蹂躪者だからであります。子供を拝む親、子供の前に手をつけて子供を真に拝むほどの親、子供よりも低い世界にいる親だけが、孝の世界の創造者であります。子供があるために助けられるのは親であります。子供をおいて外に親を生む者はありませぬ。真の子心の上だけに親があるのです。だから親を親にするのは子心であります。親の肉体が子供の肉体を生んだかも知れません。しかし親は決して子を生みません。子供の上に子心が生れて来ない間、親はありません。

だから親を生むものは子供であつて、子供こそ親であります。子供の前に頭を下げる親のみが真に親であります。育ててやるのだ、養つてやるのだ、教えてやるのだという世界には、「礼」はありません。教育者がこの考えをもてば彼は教えをふみにじる教育の叛逆者であり、子供を殺すものであります。人を導くことだけにかかわりはて、高慢になりきつて、一世の大善知識になつてしまつた宗教家は自他共に救われない人であります。

礼のない世界は高慢であります。高慢とは、人間が人間を失つて、大地から足をはなしたすがたであります。人間へ復帰するとは礼の世界に帰ることあります。礼の世界にだけ真の愛の世界があります。

礼の世界は愛の世界であつて、人と人とがほんとうの生命の世界にかへつたのであります。礼のない世界では如何なる場合にも征服が行われています。先生が子供を征服しようとしています。母親が子供を征服しようとしています。征服する者も、征服せられる人も、共に傷つきます。愛がないからであります。母親の精神生活が如何に子供の一生を支配するでありましょう。そのことを考える時、私は女性を礼拝したい心さえします。子を持つことは母の特権であります。もしこの特権を棄てて他に自分を

生かそうとする母親があるならば、彼は人生そのものを棄てようとするのでありません。幼なき日、母によつて歌われた子守歌は一生を通じて人の子の心が帰りゆくなつかしき思い出の家郷であります。いい母をおいて、いい子はありませぬ。子供に対して忠実なる母であることは、女性の大なる使命の一つであります。礼のない母の激怒や主我的な圧制は子供の一生を傷つけます。礼あるに似て礼なきは、女性の傾向であります。

礼は窮屈なはからいの世界をつくることでもなく、装いをつくることでもなくて、人間それ自身の世界へと帰つてゆくことであります。真愛の世界であります。